

創世記 1 章 1 節をお開き下さい。序論のイントロダクションは後にしまして、早速本日より本文の方に入って行きたいと思ひます。簡単に創世記という書名の意味からもう一度おさらいしたいと思ひますが、書名はヘブル語で『ベレシート』と言ひます。『ベレシート』という言葉が 1 章 1 節の“初めに”というところにも使われておひます。その意味というのは、「初め」という意味もありまひすし、「起源」という意味、すべてのものの起源、事の起こり、すべての由来。それを創世記に見ることが出来まひす。ありとあらゆるものの起源の書でまひすから、何かを知りたければ私たひすは創世記を見れば良いわけです。そこに原点がありまひす。そこに原初がありまひす。その起源の書は、聖書 66 巻の土台となつておひる書物でありまひす。聖書を理解したければ、必ず創世記を理解しなければならぬということ。特に創世記の中で初めの 1～11 章までがその土台の中の土台と呼ばれるところだす。大まかなアウトラインで言へば 1～11 章が前半ということだ、後半が 12 章～最後 50 章まで、という内容となつておひます。後半はアブラハムという信仰の父から始まひて、その子イサクの物語、更にその子ヤコブの物語、更にヨセフの物語という 4 代の族長と呼ばれるイスラエル民族のリーダーたひ、彼らの物語が後半というふうになつておひまひて、今から見る 1 章 1 節はその前半の中の最初の言葉でまひすから、1 章 1 節こそが土台の中の土台の中の土台と言うぐらひ非常に重要な聖句となつておひます。すべてのルーツはここから始まひているということだ見て行きたいと思ひます。

創世記は全部で 50 章あるわけだすけど、これをまとめたのがモーセだす。『モーセ五書』と呼ばれるものが、創世記から申命記までありまひす。勿論創造の場面にモーセが立ち会つて見たことを記録したわけではありまひせんから、これは神の啓示によつて先にモーセより以前の人たひに与えられたもの。勿論最初の人だアダムでまひすから、最初の啓示はアダムに与えられたと思われまひす。そのアダムが口伝という形か(口伝というのは、口で伝えていく。)、或いは書物に書いて、文字にして子孫に伝えていくかして、それらの文書が集まひて、それを最終的にモーセがまとめたという形になつて、『モーセ五書』という(旧約聖書中では“トーラー”と呼ばれる律法の部分だす。)そこにまとまひていったということだありまひす。

その創世記の編集者はモーセだ、天地創造というのが 1 章 1 節から 2 章 3 節までにまとめられておひるのですが、その後 11 世代にわたる歴史というものが続きます。「歴史」という言葉が「系図」というふうにも訳されておひます。ヘブル語では「トーレドース」"towldah"と言ひます。2 章 4 節、そこでは「経緯」と訳されておひます。5 章 1 節では「歴史」と訳されておひます。36 章 9 節では「系図」と訳されておひます。ヘブル語で「トーレドース」、ギリシャ語では「ゲネシス」と言ひます。「ゲネシス」というのは実は、英語の"genesis"の語源だ、その英語の"genesis"が創世記の書名となつておひます。それも「初め」という意味を持つ同言葉だす。誕生とか、起源とか、発生、創始、を意味する「ゲネシス」という言葉が英語の"genesis"創世記と日本語で訳されておひますが、その言葉が同時に 2 章 4 節の「経緯」、5 章 1 節の「歴史」、36 章 9 節の「系図」と、日本語ではそのようにそれぞれに訳出されておひます。しかし、原語は同じ言葉だす。ヘブル語では何度も言ひまひすけれども「トーレドース」という言葉だ、これもキーワードとなつておひます。

そして、それは創世記の中には全部で 11 箇所使われておひますので、その 11 箇所をまず初めに皆さんに目だ追つて頂きたいと思ひます。それら 11 箇所を確認することによつて、創世記の内容を網羅しておひますので、要約という形で分かりやすく皆さんに説明出来るかと思ひます。

初めに出てくるのが 2 章 4 節だす。『これは天と地が創造されたときの経緯である。(この「経緯」というところに「トーレドース」が使われておひます。)神である主が地と天を造られたとき、』とありまひす。これが 2 章 4 節から始まひて 5 章 1 節の前半まで続きます。おそらくこの部分はアダムが記録したと考えられまひす。アダムしかいないと思ひます。そして、その内容としてはエデンの園の物語、失樂園だす。誘惑と墮落がありまひました。そしてその後 2 人の息子カインとアベルの物語が出てきて、最初の殺人事件。兄が弟を手にかけてまひまひうという、そういう内容が 5 章 1 節まで続きます。

そして 5 章 1 節を今度見て頂くと、2 番目の「トードース」。「これは、アダムの歴史の記録である。神はアダムを創造されたとき、神に似せて彼を造られ、」この「アダムの歴史の記録」というものが 5 章 1 節の続きから 6 章 9 節まで。この部分は、5 章の系図の最後にも名前を見せているノアという人物が、おそらく記録したと考えられます。

そして 3 番目は 6 章 9 節に見られます。「これはノアの歴史である。」これが 10 章 1 節の前半まで続きます。ノアの 3 人の息子、セム、ハム、ヤペテが、ノアのあの洪水の前後に出てきますので、その出来事を記録した内容となっています。

4 番目は 10 章 1 節に出てきます。「これはノアの息子、セム、ハム、ヤペテの歴史である。」ここから 11 章 10 節の前半まで続きます。ノアの死と、そしてあのバベルの塔の事件の結果、世界中に民族が分かれ出たという内容です。そしてノアの 3 人の兄弟たちも別れ離れになって、それらの記録をセムがすべてまとめたと考えられます。自分たちから分かれ出た民族の歴史というものを、セムが記録したと考えられます。

5 番目は 11 章 10 節に「これはセムの歴史である。」とあります。「トードース」の 5 番目です。11 章 10 節から 11 章 27 節の前半までの内容です。セムから始まって、その子孫のテラとその 3 人の息子たちまでのセム族の系図がそこにまとめられています。このセム族というのが後にイスラエルという民族・国家を生み出していくのですが。

6 番目の「トードース」は 11 章 27 節にあります。「これはテラの歴史である。」それが 25 章 19 節の前半まで続きます。テラの息子たちの中で一番有名なのがアブラハムです。

7 番目は、「これはイシュマエルの歴史である。」と、25 章 12 節に出てきます。途中に挿入されているようです。イシュマエルの歴史も、皆さんも知っての通りこれはアラブ民族の先祖ですから、アラブの歴史と言って良いと思います。

8 番目が 25 章 19 節に出てきます。「これはアブラハムの子イサクの歴史である。」このイサクが、アブラハムの約束の子であって、アブラハムが神の召しを受けてから死ぬまでの生涯の詳しい歴史と、そしてアブラハムが死ぬまでに起こった息子イサクの生涯の歴史を、イサクが記録したと考えられます。彼は自分の記録に、異母兄弟であるイシュマエルの歴史も付け加えたと考えられます。それが先ほど触れたイシュマエルの歴史と呼ばれている部分です。それが 25 章 19 節から 37 章 2 節前半まで。「これはアブラハムの子イサクの歴史である。アブラハムはイサクを生んだ。」というところから始まって、37 章 2 節前半までがその息子ヤコブの歴史となっています。イサクには 2 人の子があったわけです。

9 番目が 36 章 1 節。「これはエサウ、すなわちエドムの歴史である。」このエサウというのがヤコブの双子のお兄さんです。そのエサウからエドム人というのが生まれて、このエドム人というのが、ヤコブから出たイスラエル人の兄弟部族なんですが、常に敵対する民族となっていきます。究極的には新約聖書においてヘロデ大王というエドム人が、イスラエルの約束の子イエスを亡き者にしようとして暗殺計画を練るんですけども、神の計画は人の画策によって倒れるものではありません。イエスは勿論守られて、そのまま神の御心を全うしていくようになりますけれども。そのエドムの歴史が 36 章 1 節からです。

そして 36 章 9 節に「これがセイルの山地にいたエドム人の先祖エサウの系図である。」

そして 37 章 2 節に「これはヤコブの歴史である。」ヤコブの記録、これは父イサクの晩年から、そのままヤコブは父の元を飛び出して、母の兄である叔父のラバンのところに身を寄せるわけです。なぜそうなったかという経緯はこれから学びの中で皆さんも分かってくると思いますが、そこで 20 年間奴隷奉公するわけです。でも結局故郷に戻るといことを決めて、そこで娶った妻のラケルとレア、そしてその子供たち 12 人生まれたわけです。それらを連れて再び故郷に戻って行くのですが、そして父イサクが亡くなるということもその時起こります。イサクが、兄のイシュマエルの子孫の記録を自分の記録に付け加えたように、ヤコブも兄エサウの記録を付け加えたと思われます。エドムの地で治めた王たちの記憶については、恐らく後にモーセが編纂する際に付け加えたという可能性もありますけれども、基本的にはヤコブの歴史。これが出エジプト記に繋がっていくというふうな編集方法となっております。

そのようにこの創世記というのは、『ペレシート』という書名から『起源の書』と言われていますが、特にイスラエル民

族の起源の書。そしてイスラエル民族は、イエスを信じる私たちクリスチャンにとっても異民族とか他民族というものではなくて、むしろ私たちもそのイスラエルの民に加えて頂いた、神の民の一員とされたという立場でありますから、私たちのルーツもこの**創世記**に見ることが出来るということです。もはや「私たちは日本人だから、大和民族だ。」とか、そのような考え方ではなくて、それぞれの国籍や民族を超えてイエス・キリストを信じる者は、それこそ男も女もなく神の子とされて、主にある兄弟姉妹とされて、そのルーツはすべて**創世記**に見ることが出来ます。アブラハムという人も、元々は異邦人だったわけです。元々は月の女神を拝む偶像礼拝者だったわけです。そのアブラハムが、聖書の創造主(全能者、そしてその方は勿論三位一体の神であります)、その方を信じる事が出来て、神に選ばれたわけです。そしてアブラハムを信仰の父として私たちも自分のルーツをそこにしながら、かつては創造主を知らなかった者から、創造主を知る者に変えられて、そこから私たちは信仰の歩みを始めたわけです。そして、その信仰が自分の子供たちに、孫たちに、若い世代に継承されていくように。私たちがまた信仰の歴史を作っていくように。そのことも**創世記**を通してチャレンジされます。いろいろな問題がありました。信仰の父と呼ばれているアブラハムにもいろいろな弱さもありました。夫婦関係、親子関係、また他者とのいろいろな関係トラブルの中で信仰が試されることがありました。妥協して大失敗してしまう。取り返しのつかない大きな罪を犯してしまうこともありました。でも、その都度神の憐れみと恵みによって神に立ち返ることができ、悔い改めて、そしてその信仰が連綿と脈々と受け継がれていくという素晴らしい物語でもあります。私たちがそこから学ぶことがあるわけです。励まされたり、慰められたり、戒められるということがありますので、そのような見方も是非皆さんに持って頂きたいと思います。

1章1節に目を戻して頂きまして、**創世記**のこの**1章1節**が聖書すべての土台と言って良い言葉です。この**1章1節**を皆さんが心から文字通り信じる事が出来るならば、他の聖書の箇所すべて問題なく信じる事が出来ます。「どうもこの箇所は信じ難い。」とか、「ちょっと難がある。」というふうに思われる箇所も皆さんは持っているかもしれませんが、もし**創世記**の**1章1節**を単純に書かれている通りに信じる事が出来れば、他のどの箇所もあなたは単純に信じる事が出来ます。神が**1章1節**の通り『**初めに、神が天と地を創造した。**』ということ額面通り信じ受け入れるならば、神はすべてのものを造られただけではなくて、支配されているということも信じます。そしてすべてのことがこの方には可能だということも信じます。神様には不可能な事は1つもないのだと。すべて神様がコントロールされている。ご覧になって全部知っておられる。何もかもこの方の御手の中にある。これが信じられたら、聖書すべてを信じる事が出来、そして皆さんも造られた者として、ある特別な目的を持って、意図を持ってデザインされた者として自分の価値も見出せると思います。あなたは無駄な存在ではないのです。あれも出来ない、これも出来ない、これも足りていない、何のために生まれて来たのか分からない、自分なんか居ても居なくても同じじゃないか、死んだ方がマシだとか、もう死ぬ他ないとか、もう絶望的だ、諦めなければいけない、あの人にあんなふう^{はな}に貶された、あんなふう^{はな}に傷つけられた。それで私たちは揺らいでしまいます。悲しんで、泣いて、そして本当に自分の存在意義とか、存在価値というものを見失ってしまって、自分のアイデンティティーすら分からなくなってしまうかもしれません。自分は何者なのか。どこから来て、どこへ行くのか。何のために今、息をしているのか。何をしても空しい。勉強しても、仕事をして、家族と一緒にいても、友達と一緒にいても、息をしているだけで空しいと。でも、あなたが**創世記1章1節**を信じる事が出来るならば、そのすべてから解放されます。そしてあなたは意味のある人生を始める事が出来、満たされますし、これから先もどんな神のご計画が用意されているのか、ワクワクしながら目の前がどうであれ、環境がどうであれ、周囲がどうであれ、神の御手の中にあることを信じる事が出来る者は、何一つ思い煩うことはありません。

ですからこの**創世記1章1節**は非常に重要であります。これを信じない人たちは、それなりに自分たちなりの考えというものを構築してきました。それを思想という形で、或いは哲学という形で、或いはいろんな体系でそれを作り上げてきたわけです。現代創造論運動の父と呼ばれるヘンリー・モーリスのことは、もう序論の談で皆さんには何度となくご紹介いたしました。創造論のミニストリーの草分け、ヘンリー・モーリスという人は、進化論の父がダーウィンと言われる中で、創造論の父はヘンリー・モーリスと言われる位、非常に重要な人物であります。そのヘンリー・モーリ

スが「聖書の巻頭の一節は、聖書の基礎です。」と言っています。それは先ほど私が皆さんにお伝えしてきた内容ですけれども。その彼が、この創世記1章1節は「世界の起源と意義に関する人間の誤った考えをすべて明らかにします。」と言って、7項目挙げています。

第一に、創世記1章1節は無神論の誤りを証明する。なぜならば神が宇宙を創造されたのだから。

第二番目に、汎神論の誤りを証明する。汎神論というのは、すべて神様、何でも神様。日本で言えば八百万の神という神道がまさに汎神論です。その汎神論の誤りを証明する。なぜならば創世記1章1節は、神がご自身がお造りになった宇宙を超越しておられるから。創造者と被造物、それは同じではないわけです。被造物が全部神になるわけではないです。神がすべてのものを造ったのであれば、そのすべてのものの被造物を超越した創造者がおられるということを創世記1章1節は宣言しているわけです。

3番目は、多神論の誤りを証明する。多神論は、複数の神がいるという、信じているという立場です。唯一の神がすべてのものを創造されたのだから、この多神論の誤りも創世記1章1節は証明いたします。

4番目は、唯物論の誤りを証明します。唯物論、目に見えないものは信じない。目に見えるものだけ。「物が神」と言っても良いと思いますが、その唯物論の誤りを証明する。なぜならば物質にはすべて始まりがあるからです。その始まりを創世記1章1節に見ることが出来ます。最初からものがあつたのではないです。ものがある前に創造者がおられたと。ですから、目に見えるものが絶対ではないのです。目に見えない、そのすべてのものを造られた方が絶対なのです。「目に見えるものが確かで、手で触ることも出来て、それが自分にとっての現実で、その目に見えるものほど確かなものはない。」と私たちは思い込んでいますけれども、そうではないです。目に見えるものは、それほど確かではないということです。それらは必ず朽ちて、消えて、なくなって、いつまでも信頼に足るものではないということ。

5番目に、二元論の誤りを証明する。二元論、例えば「善と悪」とか。それを“二元”と言います。二元論の誤りを証明する。多くの人は「光と闇」それがいつも拮抗して、例えば神と悪魔が、光と闇のようなものとして常にライバル関係で、この善と悪が常に対等に対峙して争っている。それは二元論です。でも創世記1章1節は、この二元論の誤りを証明します。なぜならば、神が創造された時に存在していたのは神のみであったからです。初めから悪魔が居たのではないのです。神と悪魔が初めから居て、という話であれば二元論は成り立つのですけれども、そうではないです。神は悪魔を造ったわけではありません。この話はまた後にしたいと思います。

6番目は、ヒューマンイズム、人間中心主義とか、人間至上主義というふうにも言います。ヒューマンイズムの誤りを証明する。言い換えれば「人間が神様」という考えです。しかし創世記1章1節は、神が究極的実在であつて人ではない。だからヒューマンイズムは誤りであると。ヒューマンイズムは自分を神として人間が究極的存在である。ヒューマンイズムというのは、よく「人道的な立場から」とか、人間が一番大事であつて、人間を常に中心に考えて良いように使われることが多いわけですけれども。しかし、実際にはそれは神を否定して、創造者を至高者を否定して、人間を至高者とする、絶対者とする、究極的な実在とする、という考え方ですから、非常に危険な考え方です。

7番目は、進化論の誤りを証明します。単純に創世記1章1節には、神がすべてのものを造られたからと、明言しています。この世は無神論、汎神論、多神論、唯物論、二元論、ヒューマンイズム、そして進化論で満ち溢れています。そして、それが正しいとそれぞれが主張するわけです。「神なんかいないんだ。」無神論です。「全部神様だ。」汎神論です。多神論「唯一神なんていうのは考え方が狭い。排他的である。寛容じゃない。全部の神様を認めるべきだ。仏教も神道もキリスト教もイスラム教もラマ教もヒンズー教も、何もかもすべて認めるべきだ。」唯物論「そういう霊的なものとか、宗教的なもの、神秘的なもの。そんなものは人のまやかさに過ぎない。人が作り上げた空想の話であつて、目に見える金がすべてだ。」とか、或いは「自分の健康が第一で、これがすべてだ。」とか。二元論にしても、ヒューマンイズムや進化論にしても、皆この世ではまかり通っているものです。別に違和感もなく普通にそのように教え込まれておりますし、周りの方々もそのような考え方をベースに人生を営んでいるわけです。でも、聖書はそれらすべてを誤りだと、もう巻頭の第一声からそのように宣言しているわけです。それらはすべて創造主を信じていない

不信仰の現れだと。そのように聖書は最初から断じるのであります。

他にもいろいろな体系と呼ばれるもの、思想・哲学というものがあるわけですが、事実上どういった考え方も、他のすべての考えをお互いに包括合っています。例えば、二元論というものも多神論の 1 つの要約と言えます。そして、多神論は汎神論の通俗的な表現と言います。汎神論は唯物論を前提としています。すべてのものは神様。唯物論と汎神論は呼び方こそ違えど、実質同じなんです。唯物論は勿論進化論によってその役目を果たしていきます。そして、進化論はヒューマニズムにまとめられていきます。そして最後ヒューマニズムは無神論に至っていくわけです。ですからいろんな立場があるようで、いろんな思想や信仰体系が、哲学があるようですが、とどのつまところは「創造主を認めない。」という立場。それが人間によっていろんな学問の分野とか、思想の分野に多岐に渡ってそれらがいろんな呼び名がつけられているだけであって、本質は一緒です。創造主を認めて信じて行く立場か、創造主を否定して信じて行かない立場か。そのどちらか一方を私たちは選択しなければいけません。**創世記 1 章 1 節**を持って、神は私たちに迫ってくるわけです。「あなたはこの言葉を信じるか。」信じるか、信じないか、によって私たちの生き方が変わってきます。私たちの行き先も変わってきます。ですから、この巻頭の言葉は、聖書の中で最も重要な言葉です。ここでつまずいたら、もう全て終わるわけです。

参考までにヒューマニズムの体系の中に、自然主義とか、斉一(せいいつ)説とか、理神論、不可知論、一元論、決定論、また実用主義といった他の呼び名もありますけれども、『**初めに、神が天と地を創造した。**』と、これはもう難しい言葉ではないですね。別に高度な学問を習得していなくても、小さな子供でも**創世記 1 章 1 節**が何を意味しているのか、分かるものです。ですから、最初から神はもう存在していることを大前提に、その神がすべてを造られたと。神が居るか居ないかなんていうことは、一切聖書は議論しません。神の存在証明から聖書は始めているのです。私たちは、神が居るか居ないかという議論から始めようとするかもしれません。まずは神の存在証明から。でもそれは聖書がやっていないことなので、むしろ聖書は**詩篇 14 篇 1 節**というところには『**愚か者は心の中で、「神はいない。」**』と言っている。』と。ですから、初めからご自分の存在というものを、もうしっかりと議論の余地がないものとして宣言されて、そしてこの**創世記 1 章 1 節**の天地創造の時点で、他に神があるとか、また進化論が実際に科学として存在していたかとか、そういったことはまったく話題にもならず、初めに神がもう居られて天と地を、すべてを造られたと。その後にそれを信じない者たちが、先に挙げたような無神論を始めとした汎神論とか、多神論とか、唯物論とか、ヒューマニズムといったものをその後に作り上げたというものですので、私たちはすべての起源が**創世記**にあるということで、いま私たちが知っているいろいろな学問や信仰体系や思想や哲学や宗教、それらは**創世記 1 章 1 節**の後から生じたものだということを知らなければいけません。

創世記 1 章 1 節。『**初めに、神が天と地を創造した。**』というこの聖句に出会って人生を変えられた人が勿論沢山いるわけですが、特に日本を代表するクリスチャンの一人で新島襄のこともこの時皆さんにお伝えしておきたいと思います。新島襄というのは、もう最近、奥さんの『八重の桜』という NHK のドラマでも名が知られて、また注目されるようになった人ですが、同志社大学の創立者だということぐらいは皆さん知っていると思います。その新島襄の生涯を変えたのが、この**創世記 1 章 1 節**の言葉でありました。それによって彼はイエス・キリストを信じる信仰に導かれていきました。江戸時代の末期 1860 年、新島襄は 18 歳でありました。その時に当時は御禁制だった漢語訳の、中国語の聖書に触れて、その書き出しの**創世記 1 章 1 節**の言葉を深く考えさせられたということです。彼曰く「この世界には、存在するあらゆるものは、これを創造された神が居られなかったら出来ない筈だ。机は大工が作った。しかしそれを作った大工も、また大工が用いた用材も人間の業で出来たものではない。ならば聖書の言う通り、この世界にはまことの神が居られて、この天地万物をお造りになり、それらを支配しておられる神が居られるのだ。」と、この理解が新島襄をキリスト教信仰へと導く切掛けとなりました。ご存知の通り当時は鎖国時代でありました。キリスト教は国禁とされていて、聖書も禁書扱いでした。でも新島襄は 21 歳の時に国外脱出を試みました。1864 年 6 月 14 日の夜中にアメリカの商船ベルリン号に乗り込んで、翌年 1865 年 7 月 20 日にボストンに入港しました。そして 1872 年の岩倉全権使節団と出会って、新島襄はそこで通訳を務めました。その後通訳を務めなが

ら欧米の教育制度を視察するうちに、日本でキリスト教に基づく教育の必要性を感じるようになって、それが後の同志社大学の設立に繋がっていきます。創造主なる神に出会って、人間は自分の存在とその生に確固たる意味・根拠と存在意義というものを、生の意義というものを、目的というものを知る道が開かれるということ、新島襄の回心物語からも知ることが出来ます。

もう一人日本を代表する有名なクリスチャンとして名の知れている人がいます。新渡戸稲造という人です。少し前まで 5,000 円札の顔となっていました。でも意外と新渡戸稲造がクリスチャンだということを知っている人は少ないと思います。聖書の最初の言葉『**元始に神天地を創造たまへり**』という文語体です。これを漢文で新渡戸稲造も読んで、その言葉に衝撃を受けて、彼もまたキリスト教信仰を持つに至ったということです。

今度は日本人ではなくて、科学者の言葉も紹介したいと思います。ノーベル物理学賞を受賞したアーサー・コンプトン博士がこう言っています。「私の場合は、至高の知的存在、まことの神が、この宇宙を創造し、人間を創造したという実感から信仰が始まる。そのように信じることは私にとって特に難しいことではない。設計のあるところには知性があるというのは論争するまでもなく明らかである。『初めに、神が天と地を創造した。』という聖句は、今までに出された声明の中で最も威厳のあるものだが、秩序正しく広がっている宇宙はその聖句が真実であることを証言している。秩序正しく広がっている宇宙は、『初めに、神が天と地を創造した。』という最も荘厳な言葉の真実さを証明するものである。」と。世界のトップの科学者が、**創世記 1 章 1 節**を文字通り信じております。そしてその聖句を証明すべく宇宙を研究した人、と言って良いと思います。そのようにして聖書を文字通り信じた人たちが、近代科学の分野をどんどん開拓していったということは皆さんも知っての通りだと思います。近代科学の父アイザック・ニュートンを始め、天文学者だけではありません。或いは物理学者だけではありません。生物学者や地質学者や、ありとあらゆる分野。進化論によって歪められてしまったそういった学問の分野においても、研究すればするほどそれらがすべて偶然によって生じたとか、単にビックバンですべてが法則に基づいて秩序だって美しくデザインされたような形に偶然成り立つなんていうことは、とても信じられない。追求すればするほど彼らは、創造主の存在に目を閉じるわけにはいかなくなるわけです。認めざるを得なくなるわけです。

そしてもう一人、宇宙開発の父ウェルナー・フォン・ブラウンの言葉も前に紹介したいと思いますけれども、ロケット開発の分野で、彼はそういった分野で今でも影響をもたらしている人です。「宇宙の広大な謎は、創造主は間違いなく存在するという私たちの信念を追認するばかりであろう。宇宙の背後に優れた合理性があることを認めない科学者を理解することも、科学の進歩を否定する神学者の真意を把握することも、私にとっては難しいことだ。私が神を信じている理由ですか。簡単に言えば、主な理由はこういことです。私たちの地球や宇宙のように秩序が整いかつ完全に創造されているものには、必ず造り主、卓越した設計者が居るに違いないということです。この宇宙のように非常に秩序正しく、非常に完全で、非常に正確にバランスの取れた、そして非常に雄大なものは、神の構想の所産以外のものではありません。造り主は居るに違いありません。それ以外に考えようがありません。」それ以外に考えようがないというのが、科学を追求しリードする人たちの共通した結論であります。

アインシュタインも同じようなことを言っています。「私は神の天地創造の足跡を探していく人間である。」彼がクリスチャンかどうかということは、彼自身がハッキリそう言っていないので不明ですが、皆さんも知っての通りアインシュタインはユダヤ人です。ユダヤ人は当然聖書を知っています。聖書の巻頭の言葉、**創世記 1 章 1 節**をアインシュタインは当然知っているわけです。彼は、間違いなく宇宙の発生は偶然ではなかったと。進化論で説明するような宇宙の起源説というものを全くもって信じていなかったことは、明らかであります。ですから、私たちは**創世記 1 章 1 節**を見ると「こんなおとぎ話、信じられない。これはただの神話でしょう。」と頭ごなしに否定します。それは創造主を認めたくないからです。しかし、実際に今挙げたような歴史上の偉人たちが、彼らは私たちよりもいろんなことを知っているわけです。私たち以上にいろんな分野で活躍し、世界的に認められている知識人たちです。大きな働きも成し遂げたような、今でもその恩恵に私たちが与っているような、そんな偉大な人物たちもまた**創世記 1 章 1 節**を否定せずに素直に認め、受け入れていった人たちだということを知りたいと思います。それなのに何も知らない私たちが、

「そんな創世記なんて馬鹿らしい。信じるに値しない。」と、何にも調べもしないで、考えもしないで、頭ごなしに否定するのは、ただの盲目的な信仰、盲信というものです。創造主を認めない信仰です。無神論という信仰、それをただ信奉しているだけで、「私は創造主など信じない。創世記1章1節など信じない。私の信じているのは無神論である。或いは進化論である。或いはヒューマニズムである。」そうやってそれぞれの名前をつけた宗教を信奉しているだけで、それには何の根拠もないということです。ただ信じたくないから、という理由です。

1章1節を見て下さい。これは日本語で読んでなかなか分かりづらいと思うんですけども、ヘブル語では“はじめに”という言葉が「ベレシト」と言いました。これがこの**創世記**の書名ともなっていると言いましたけれども、その後に来る言葉は「バーラー」という言葉です。「ベレシト バーラー」。「バーラー」というのが“創造した”という言葉です。そして、その後「エロヒーム」。これが“神”と訳される言葉です。その後「エツウ」、これは訳されていないヘブル語の言葉です。特別の言葉なので、また後で話したいと思います。「ハ・シャマイム」。「ハ」というのは定冠詞です。「シャマイム」という言葉が“天”という言葉です。ちなみにこの“天”というは複数形です。そして、その後また「エツウ」という言葉が来て、「ハ・エレツ」。「ハ」というのが定冠詞で、「エレツ」というのが“地”です。この“地”というは単数形です。ひとつの地。天は複数形ですが、地はひとつだけです。後でこれも説明しますが、天が複数形になっているというのは、聖書によれば私たちがこの地上から見上げる青空・大空、それが第一の天。そして宇宙が第二の天。そして、第三の天というのが神がおられる永遠の世界、所謂天国というところ。その第三の世界へと私たちは向かって行くわけです。そこに携挙されて行くわけです。パウロは実は一度死んだのですけれども、彼は携挙されて第三の天まで引き上げられた。“引き上げられた”という言葉がギリシャ語で「ハッピーゾー」と言って、「ハッピーゾー」というのが“携挙”に使われている言葉と同じであります。でもそこからまた戻って来たのです。そしてまた復活して、地上で宣教活動をして、最後は皇帝ネロによって首をはねられるわけですが、その“天”は複数形なわけです。神はそのすべてを最初に造られたのです。でも、“地”に関しては単数形です。ひとつの地です。この“地”というは何を指すのか。それは地球を指します。これも後で詳しく説明しますが、驚くべきことに神は全宇宙を造って、最初に地球を造られたのです。その後ずっと読み進めていくと、地球以外の星々も惑星も造ったと。太陽もその後造っているわけです。それが**創世記**の主張です。これは勿論今日の進化論とか天文学とか宇宙物理学からすると、あり得ないと考えるところですが、でも彼らが「あり得ない。」と言っている彼らの説もまた信憑性のない、根拠のない、空想の産物でしかないものです。ですから結局は問われているのは信仰だけです。**創世記1章1節**を信じるのか。それとも神でない人間が空想した推論という説を絶対視して、それを真理として信じ込んで思い込んで一生涯それを握り締めていくのか。どちらかの信仰、どちらかの偏見、それを私たちが選ばなければいけないということです。創造論と進化論。どちらもこれは科学というよりは、信仰体系であるということは前回の序論のところでもお話ししました。どちらが妥当かということ、それを私たちが選ばなければいけないということです。

そこで原語で紹介した『ベレシト バーラー エロヒーム エツウ ハ・シャマイム エツウ ハ・エレツ』これは全部で7つの言葉からなっています。なかなか日本語では知り得ない内容なので難しいと思うのですが、7つの言葉から始まっているというのは勿論意味があることです。聖書では7という言葉は完全数です。聖書は完全な書物で、**創世記1章1節**も不完全ではなくて完全な聖句です。実際に**創世記1章**を見て頂くと、7という数字とか、或いは7の倍数が多く使われていることにお気付きになるかと思いますが。このことはもう古代のユダヤ人たちも気付いて、彼らもそのことを指摘して来ております。創造の活動は全部で7日間で行われました。6日間で造られて、7日目に休まれたわけです。合計7日間。これが今の1週間のベースになっています。

そして2番目に、“神”という名前が7の倍数である35回、**創世記1章**に使われています。そして、“地”という言葉も7の倍数の21回使われています。“大空”という言葉も7の倍数の21回使われています。これは数字的にもデザインされている構造となっています。

3番目に、神の創造は7つの一般的創造行為を導き出す宣言と、3つの人間の幸福に関する祝福の言葉から成り立っています。7+3=10 となって、10も『十戒』に使われている言葉で、完全を意味する言葉でもあります。特に

その7つの創造行為を導き出す宣言というものが、**創世記1章**に見られます。

4番目に、第一日には光と闇が7回繰り返され、第4日目には光に関する表現が7回あります。

5番目に、第2日と第3日に“水”という言葉が7回使われています。

第6番目に、“よしとされた”という、特に7番目は「非常に良かった」というふうに訳していますが、それも全部で7回あります。

7番目に、1節というのが7つの単語から成っているということを先に触れました。

8番目に、第7日目はそれぞれ7つの単語からセンテンスが三つ続いて、中間にそれぞれ“第7日目”というのが使われている。これは**2章2～3節**。こういうデザインが**創世記1章**、或いは**2章**の方にも言及されていくわけですが、この驚くべきデザインについては、序論のところでも**創世記**にも数学的な驚くべきデザインが組み込まれていて、暗号のようなものが組み込まれていて、実際に7の倍数である49文字の間隔でヘブル語の単語4単語。それらが「トーラー」「TORH」を表す律法を意味する4つのアルファベットが、等間隔で刻まれている。49文字毎にアルファベットが一文字、そしてまた49文字後にまた一文字ということで、それらが「トーラー」を作り上げるアルファベットということで、そういったデザインが完璧に施されていますので、こういった内容からしても聖書は人間の書いたものではない。**創世記1章1節**が信じられないと言う人も、実際にこのつくりそのものを見ても、これは人間が書けるものではない。そして、コンピューターを駆使してようやくその暗号が誰にでも理解出来るようにされていますので、今私たちは確信を持って、この**創世記**という書物は神によってデザインされて、神によって靈感によって書かれたものをモーセが編纂したもので、人が創作物語として作るような、そんな他の創造神話だとか、他の古代の文書と肩を並べるような、そんな同レベルのものとは全く違う、次元の異なる驚くべき文書であって、書誌学の点でも、文献学の点でも、歴史の点でも、この聖書というものは非常にユニークなもので、これは真面目に学問をやる人にとっても普通の書物ではないという理解に至りますので、その**1章1節**はどんな分野においても超自然的な言葉として、信じるに値する言葉として受け止めることが出来るようになります。

また**1章1節**に話を戻したいと思えますけれども、この「ベレシート」という言葉が初めに出て来ますが、これが時間の始めとなります。最初から時間があったわけではありません。神は永遠の神ですから、永遠という状態は時間のない状態です、時間に縛られない状態です。この方が初めにすべてを造られたわけです。そのすべての中に当然時間も含まれているわけです。宇宙をつくる際には空間だけではダメです。物質だけではダメです。時間もつくらなければいけないわけです。時間が始まるということは、そこから時間が過ぎていくわけです。目に見えるものが朽ちていく、崩壊していく。それがまた1つの物理法則であるわけです。これは熱力学の法則になるのですが、それも神が造られた法則ということで後で説明したいと思えます。初めにネジを巻かなければならなかったという、よくそういう表現が成されますけれども、宇宙には始まりがあるということです。かつては、宇宙には始まりがあると信じられていなかったのです。でも今は、最新の科学によれば、宇宙には始まりがあるということが認められています。でも**創世記1章1節**はもう昔から、モーセが編纂したということであれば今から3500年前から宇宙には始まりがあると宣言しているわけです。天地創造だけではなくて、時間の始まりにも既に言及しているわけです。もう最新の科学を先取っているわけです。そして、その前から当然その時間を造られた創造者は存在していました。時間を超越した神がおられたということ。そのこともまた皆さんに覚えて頂きたいと思えます。時間には一切縛られない方です。永遠の神です。

この「ベレシート」という言葉は、ギリシャ語で「エンアルケー」と訳されました。この「エンアルケー」という言葉が実は、ギリシャ語で書かれている新約聖書のヨハネの福音書**1章1節**に使われています。**創世記1章1節**とともにヨハネの福音書**1章1節**も大切にしていきたいと思えます。『初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。』その“初めに”というところが「エンアルケー」という言葉です。当然これはヘブル語では「ベレシート」と訳される言葉です。宇宙には始まりがありますけれども、言葉である子なる神キリストは既にその前から存在しておられたということです。ですからこのヨハネ**1章1節**は、実は**創世記1章1節**に先行する内容です。書物とし

ては**創世記 1 章 1 節**からスタートしていますけれども、ただ時系列に見ますと、どこが 1 番初めになるかと時間的に言うと、**ヨハネの福音書 1 章 1 節**がすべての初めの始めを記している内容です。**創世記 1 章 1 節**に先行する内容が**ヨハネの福音書 1 章 1 節**で、“ことば”はイエス・キリストを指しているのは明らかです。イエス・キリストは時間・宇宙を超越したお方だというのがここでの主張です。**2 節**にも『**2 この方は、初めに神とともにおられた。3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。**』私たちの信じている救い主イエス・キリストは、もう**創世記 1 章 1 節**より前から存在された方で、この方によってすべてのものは造られた。天地創造にもイエス・キリストは関わっておられるということが、ここで知られます。私たちが信じている救い主は、私たちが想像するよりももっとスケールの大きな方だということを知って下さい。今から 2000 年前のクリスマスにこの世に赤ちゃんとて来られた方は、もう既に**創世記 1 章 1 節**より前から居られたのです。2000 年前に生まれて存在し始めたのではないのです。その前から既に存在していたのです。ただ人間としてこの世に来られたのが、人間の歴史に介入された今から約 2000 年前のクリスマス、勿論 12 月 25 日生まれたとは限りませんが、聖書の記述から判断すれば恐らく秋にイエスは生まれておられると思います。いずれにしてもイエスがこの世に生まれたことによって歴史が 2 分されました。イエスがこの世に来られる前のことを BC (before Christ) 紀元前と言います。それはキリスト紀元前という意味です。キリストが来られてからは AD、紀元は勿論キリスト紀元、AD はラテン語で(anno domine)で、「私たちの主の年」という意味です。今年「私たちの主の年」AD2015 年。今はもうクリスマスの時期に入っています。イエス・キリストがこの世に来られて 2015 年経ちましたということなのですが、その前に 12 月 25 日以前に生まれて、2015 年よりもっと前からイエスは生まれていたことは明らかですけれども、イエスとなる前から、歴史が始まる前から、時間がつくられる前から、この方は子なる神として、神の御子として存在しておられたということも、**ヨハネの福音書 1 章 1 節**から知ることが出来ます。

ヘブル語の語順ですと**創世記 1 章 1 節**は「ベレシート」の後に「バーラー」という「創造した」という言葉に続くのですが、今は日本語の聖書の語順に従って説明して行きたいと思しますので、「初めに」「ベレシート」の後は、“神が”となっています。“神”これは「エロヒーム」という言葉だと先に紹介しました。「エロヒーム」という言葉は“神”と訳される言葉ですけれども、「超越しておられる方」「超越者」。元々の原意は「力ある者」という言葉です。ですから、「超越者」とか、「大いなるお方」「究極的なお方」「絶対的なお方」「審判者」「裁き主」というような形で使われる言葉です。これは複数形なんです。「エロヒーム」。最後に「イーム」という言葉が語尾に付いたら、ヘブル語ではそれは複数形です。“天”という言葉が複数形だということを紹介した時には「シャマイム」と言いました。「イーム」という言葉がやはり付いています。その「イーム」という言葉が付いたら、最後これは複数形を意味する言葉だということで、この「エロヒーム」複数形です。神様は複数形としてここにまず登場するわけです。「じゃあ、多神論なんですか。」と思ってしまうかもしれませんが、そうではありません。ちなみに「エロヒーム」は複数形ですが、単数形は「エル」と言います。「エル」という言葉が、「力」を意味する言葉であります。そして、ヘブル語には単数形と複数形だけではなく、その間の双数形という文法があります。双数というのは、2 つの数という意味です。ですから、神は 2 人いるという言葉がありまして、それを「エラ」と言います。1 人の神が「エル」、2 人の神が「エラ」双数形です。そして複数形というのは、3 人の神様のことを言います。それを「エロヒーム」と言います。ですから、「エロヒーム」というのは、少なくとも 3 人の神様を指す言葉です。「エル」が、神。単数形。「エラ」が神々の双数形。そして「エロヒーム」は神々神という日本語にはない 3 人の神様を指す言葉です。これはヘブル語の言葉なので、日本語ではそれに相当する言葉はありません。その「エロヒーム」は文脈によっては「神々」と訳されたりしています。偽りの神々のことも「エロヒーム」と呼ぶことがあるわけです。**詩篇 96:5** 等にはその用例があります。その場合は固有名詞としてではなくて、普通名詞として使われます。日本語でも「八百万の神」と言います。何でも神様です。笑いの神様とか、野球の神様とか、何でも神様にします。でもそれは普通名詞です。この「エロヒーム」は固有名詞として最初に使われます。普通名詞はいろんな神々、偽りの神々、偶像神を表しますけれども、ここで**創世記 1 章 1 節**に出てくる“神”「エロヒーム」は、これは固有名詞として使われます。ちょうど私たちが聖書の神を固有名詞として使っているのと一緒です。神道でも

神と言いますけれども、神道の“神”と聖書の“神”は勿論同じ神でも、違う神を指していることは明らかです。紛らわしいですけれども、違いがあるわけです。

創世記 1 章 1 節のその“神”「エロヒーム」が普通名詞ではなくて固有名詞だということがどうして分かるかと言いますと、“創造した”という動詞「バーラー」という言葉です。これは 3 人称単数形です。本来は複数形の「エロヒーム」ですから、動詞はやはりそれに呼応していくわけです。それに対応していくわけです。日本語ではそういう文法的な表現はないですけれども、本来であれば主語が複数形ならば動詞も複数形で受けるはずなのです。それが正しい文法というものですけれども。ところが、この複数形の「エロヒーム」の“神”は、“創造した”という時には単数形でこの動詞は受けているわけです。ですから、3 人の神でありながらも 1 人の神であるかのように扱われているということです。複数の神が唯一の神であるように扱われている内容。これは文法ミスではなくて、意図的にこの「エロヒーム」が、そういう特殊な神だということを最初から宣言しているわけです。3 人いるようすけれども 1 人の神だということを最初から述べているのが、1 章 1 節。それを神学用語で『三位一体の神』と言うわけです。『三位一体の神』という言葉そのものは聖書の中には 1 度も出てきませんけれども、でも創世記 1 章 1 節から、もう最初から『三位一体の神』は登場しているのです。その概念は最初から打ち出されているのです。後から神様がいろいろと加わってきたというのではないのです。もう最初から端^{はな}から 3 人の神が 1 人の神だと、そういう表現からスタートしているわけです。旧約聖書にこの「エロヒーム」という言葉が 2,500 回以上使われています。1 章に限って言うと 22 回出てきます。そして、この「エロヒーム」が“創造した”「バーラー」というこの使い方というのは、他の偶像神、偽りの神々には絶対に使われないコンビネーションです。創造主が「エロヒーム」として“創造した”「バーラー」という言葉。「バーラー」は常に創造の神の働きに使われる特殊な動詞として出てきます。これも後で説明します。ですから、最初から『三位一体の神』が天地創造の働きに関与したということが宣言されています。

そして『三位一体の神』の中身ですけれども、皆さんも知っての通り、第 1 位格が父なる神。第 2 位格が子なる神、その方が人となってイエス・キリストと呼ばれるお方です。そして、第 3 位格が聖霊なる神です。“位格”という言葉は、英語では“person”という言葉です。人間には“人格”と充てますけれども、神には“神格”或いは“位格”と言います。トリニティ“Trinity”と英語で言います。或いは“triune God”三位一体の神様。それぞれが天地創造の働きに関与したということは他の箇所でも知ることが出来ます。詩篇 102 篇 25～26 節『²⁵あなたははるか以前に地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです。²⁶ これらのものは滅びるでしょう。しかし、あなたはながらえられます。すべてのものは衣のようにすり切れます。』“あなた”と言っているのは、明らかに父なる神を指していると思われます。そして、すべてのものは滅びましようとか、或いはすべてのものは衣のようにすり切れます。これは宇宙に始まりがあったということを詩的に表現しています。これがいわゆる熱力学の法則、エントロピーの法則です。形あるものが崩れていく。そういうことが聖書に最初から言及されているわけです。一昔前までは、一般的な科学としては、宇宙には始まりがなかったと、そう信じられていたわけです。永遠だと思われていたわけです。でも、聖書はそうではありません。最初から始まりがあって、必ずそれらすべては滅びに向かっている。これは、今はもう自明のことでもありません。

他に第二列王記 19:15『ヒゼキヤは主の前で祈って言った。「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、主よ。ただ、あなただけが、地のすべての王国の神です。あなたが天と地を造られました。』

そして、使徒の働き 4:24『これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。』これらは、父なる神がすべてのものを造られたということを言及している聖句であります。

今度は第二位格の子なる神も天地創造を成されたという、その働きに関与されたということ。これはもう既にヨハネの福音書 1:1～3 のところで先程読みましたから、そこは 1 つもう押さえました。ことばであるイエス・キリストがすべてのものを造られた。この方によらずに造られたものは何もないということを見てきました。

そして、次にコロサイ 1:16『なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見え

るもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。』“万物は”すべてのものは、という言葉です。御子にあって造られた。目に見えるものだけではなくて、目に見えないものも造られたということも言われています。『王座も主権も支配も権威も』これらは実は御使いたちを指しています。天使もイエスが造ったのです。ですから、キリスト教系の異端が言う、例えばエホバの証人は「イエスは大天使ミカエルだ。」と、違います。ミカエルは造られたものです。イエス・キリストが天使を造ったのです。或いはモルモン教では「イエス・キリストはルシファーのお兄さんだ。」と教えます。ルシファーというのは後に墮落したサタンです。サタンの前身がルシファー。“ルシファー”というのはラテン語で「明けの明星」という意味です。イザヤ 14 章に、明けの明星、暁の子が、いと高き方、神のようになろうとして墮落していく様が、そこに記録されています。ルシファーのお兄さんですから、それは天使として理解されるわけです。その天使が神だというふうにもルモン教は教えるわけです。モルモン教は何でも神様、人間もモルモン教徒であれば神様になれる。アダムとエバのようにあなたも将来惑星を与えられて、そこであなたもその惑星を治めるようになる。そういう荒唐無稽なファンタジーを教えているのがモルモン教です。でも、聖書はハッキリとイエス・キリストは天使ではない。イエス・キリストは天使をも造られた創造主だと説いています。

もう 1 箇所へブル 1:2『この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。』これらから御子イエス・キリストが天地創造の働きに関与されていたことが明らかです。

そして、残す第 3 位格聖霊なる神も天地創造の働きに関与されました。それは、今日は詳しく見ませんが、創世記 1 章 2 節のところに出てきます。『地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が(聖霊なる神が)水の上を動いていた。』天地創造のところに聖霊なる神が登場しています。

次にヨブ記 26:7⁷神は北を虚空に張り、地を何もない上に掛けられる。(これは地球のことを指しています。北に虚空を張って。これは現代の言葉で言うと、地球が何もないところに、宇宙空間のところにある一定の位置に、これは地軸というものとして傾けられて、そして 8 節のところに)⁸神は水を濃い雲の中に包まれるが、その下の雲は裂けない。(大気で包まれているわけです。)⁹神は御座の面をおおい、その上に雲を広げ、¹⁰水の面に円を描いて、光とやみとの境とされた。(先ほど、神の霊が水の上を動いている、と言いましたけれども、そこが聖霊が働いているという場面です。)¹¹神がしかると、天の柱は震い、恐れる。¹²神は御力によって海をかき立て、神の英知をもってラハブを打ち砕く。(ラハブというのは、恐竜を指す言葉です。)]¹³そういう天地創造の場面の、特に地球の創造のところに聖霊が深く関わっているということが言われています。

そして、詩編 104:30『あなたが御霊を送られると、彼らは造られます。また、あなたは地の面を新しくされます。』御霊というのが聖霊なる神です。他にも聖霊なる神は、最初の人アダムとエバが土地のちりから造られた時に、神が鼻に息を吹き込まれたとあります。その“息”という言葉は、「霊」というふうに訳される言葉でもあります。神の霊が吹き込まれて人が生きた者となった。私たちがこうして今も生きているのは、神の霊によるということ。その神の霊が生きている限り、私たちは永遠に滅びることがないということです。イエス・キリストを信じることによって神の霊が私たちの中にも吹き込まれたわけです。それがクリスチャン。本当に生きている人です。神の霊がない人たちは、生きているようで死んでいる人たちです。肉体は活動しています。生き生きしているように見えます。輝いているように見えるかもしれませんが、イエス・キリストを信じていない人の内には、聖なる神が住むことが出来ません。なぜならば、罪人の中に聖なる神が同居出来ないからです。罪は処理されない限り、聖なる神は霊として住むことは出来ません。でもクリスチャンの内には聖霊が住んでいます。それはつまり罪がすべて処理されたということです。どうやってか。皆さんも知っての通り、御子イエス・キリストが十字架にかかって、すべての罪を処理して下さったわけです。その御子を信じる者は罪を赦され救われて、その者の内には神の霊が吹き込まれて生きた者となる。しかも、二度と死ぬことのない者となるわけです。新しい創造というのも聖霊なる神によって成されていくということを私たちは教えられています。

そのようにして私たちは三位一体の神が最初から居られて、天地創造の働きに関与されているということを知ります。

また参考までに**申命記 6:4**も、これも聖書の中で最も大切な言葉としてイエス・キリストによって挙げられています。**創世記 1:1**も最も重要な言葉であります、**申命記 6:4** これは聖書の中で最も大切な戒め『**シエマの朗誦**』とユダヤ人が呼ぶものです。毎日唱えるものです。『**聞きなさい**。(これがヘブル語の“シエマ”。これを朗誦するんです。毎日毎日事ある度にユダヤ人たちはこれを朗誦します。)イスラエル。【主】は私たちの神。主はただひとりである。』その後の**5 節**が『**心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい**。』これが第一の戒めだとイエスがおっしゃったものです。特に**4 節**の【主】は私たちの神。【主】は太字の主で、これは神の個人名、“**ヤーウエ**”を表す言葉です。神聖 4 文字 יהוה 。英語の表記では YHWH となります。一昔前は文語訳であれば“エホバ”と呼んでいたものです。エホバの証人が台頭してきたので、今は“エホバ”という言葉は使われなくなりましたが、古い讚美歌とか古い聖歌では、まだ“エホバ”と表記するものもあります。そして、その“エホバ”は今日は誤読であって、おそらく“**ヤーウエ**”と読むであろうと。“ハレルヤ”のヤが“**ヤーウエ**”のヤだからです。そして、その“**ヤーウエ**”が私たちの神。この神が“**エロヒーム**”です。“**ヤーウエ**”が“**エロヒーム**”。ですから、三位一体の神は“**ヤーウエ**”と呼ばれる方で、その“**ヤーウエ**”はただひとりである。ただひとり。ですから、“**ヤーウエ**”と呼ばれる 3 人の神は、ひとりの神だ、ただひとりの神だ、と言明されているわけです。この“ひとり”という言葉は、ヘブル語で“**エハドゥ**”という言葉で、その意味は「**複合的 1**」という言葉です。複合的。いろんなものが 1 つになっているという。ここでは、父なる神、子なる神、聖霊なる神。3 人の神が 1 つとなっている。複合的 1 であると。これは夫婦の起源にまつわる聖句にも使われている言葉です。「**人は父と母を離れ、ふたりの者は一心同体となる**。」の“**一心同体**”という言葉も“**エハドゥ**”という言葉です。別々の男と女が、結婚することによって一体化するわけです。1 人の人のようになる。それを“**エハドゥ**”と言います。勿論見て呉れは 2 人に見えます。数量で言えば、確かに 2 人存在するわけです。でもその夫婦は、神の目からは 1 人の人にしか見えないわけです。この概念を忘れてはいけません。私たちキリストにある夫婦は、神の目には 1 人にしか映っていないのです。だからバラバラということはありません。「勝手にしたら、あなたの好きなように。私とあなたは違うんだから。」それはあり得ないことです。でもキリストにない夫婦はそれで成立します。一体化しているのは、私たちの内には聖霊なる神が住んでおられるからです。私たちを一体化するのは、この聖霊の働きです。ですから、クリスチャン同士のその夫婦であれば必ずそのような一体化を経験出来ます。でも、そうでなければそのような親密な一体感を経験出来ませんから、私は何度も皆さんに伝えている通り、クリスチャンは最低でも少なくともクリスチャンと結婚しなければいけない。でも、勿論クリスチャンだったら誰でも良いということではありません。神が選ばれた人がたった 1 人、この世のどこかに存在しているはずで、あなたが結婚に召されていれば、必ずどこかに 1 人存在しています。アダムにエバが用意されたように。だから齟齬する必要はありません。神を信じて下さい。でもクリスチャンなのにノンクリスチャンと結婚しようとするのは、これはもう論外でしかありません。もうその人は最初から“**エハドゥ**”の関係を放棄しているわけです。そういうレベルの結婚生活は望んでいないということです。ただ肉体的には一体化するかもしれませんが、それ以上の深みは経験出来ません。それはパウロの言葉を借りれば「**釣り合わぬくびきを負う**」という関係です。全然釣り合っていない 2 人が、一生涯全く別の価値観を持って、全く別の方向性を持って、行き先が全く違う、そこへ向かって生きているわけです。同じ屋根の下に暮らしているながら、2 人は一体化していないのです。非常に残念な状態です。ですから、最初はノンクリスチャンの夫婦同士でも結婚してどちらか一方がクリスチャンになったならば、どうか片割れが、伴侶が救われるように祈って下さい。そしてその人が本当に聖霊によって満たされた時に、あなたは今までにない結婚の豊かさを味わうこととなります。勿論結婚しなければそのような特別な体験は出来ないかと言ったら、そうではありません。生涯独身を貫く人も、そのように召されている人もあると思いますから、でも心配は要りません。その人には花婿が用意されています。その花婿は言わずと知れたイエス・キリストであります。イエス・キリストと私たちは一体化するわけです。ですから教会とキリスト、それは夫婦の関係によく**エペソ 5 章**から教えられることもあるわけですが、そこはまさに一体化している状態です。キ

リストと教会、夫と妻が一体化している。クリスチャンとノンクリスチャンと一緒に活動しても教会にはなりません。分かりますか。それと同じように、ノンクリスチャンの夫とクリスチャンの妻が例えば結婚していても、それでは教会にはならないわけです。限界があるということです。別にいろいろな活動は一緒に出来るわけですが、教会にはなれないわけです。

話を戻したいと思いますが、この“エハドゥ”という言葉は、「一体化」という言葉で、三位一体の神がここにも表されています。「一体化の1」という言葉以外にもヘブル語には別の言葉も、1を表す言葉もあります。数量的に1を表す言葉が別にあります。絶対的な1という数字の1を表す言葉が、「ヤッヒール」という言葉が別にありますから、もしここに「ヤッヒール」という言葉が使われていたら、三位一体の神は矛盾するわけです。3人で数量的に1ということはあり得ないからです。でも3人の神が居ながら(3人の神という表現も不適切ですけど)、三位の神が居ながら、その方がたった1人。それは“エハドゥ”という言葉でなければ表現できないわけです。一体化している。もはや2人は2人ではない。1人だと言うのと同じ使い方です。それが私たちの信じる神である。その方が天地万物の創造に深く関わっておられるということです。

そして次に考えて頂きたいことは、皆さんはもう既に**創世記1章1節**も信じている方々ばかりだと思うので、かつて皆さんが考えたこと言っても良いと思いますし、また周りの方々からもしかしたら問われること。そしてよく攻撃されるそういった質問。それが「神が天地万物を造ったと聖書は言っているけれども、その神をつくったのは誰なのか。」という、皆さんも考えたことがあると思いますし、また実際にそういう質問を受けて、皆さんは言葉に詰まってしまう。どう答えたら良いか分からないという悩みを抱えたこともあるかと思います。そういう頭ごなしに**創世記1章1節**を信じない人たちというのは、常に粗探しをしようとして、懐疑的に神がすべてのものを造ったということを否定したいので、その神を誰がつくったのかという難問をふっかけてくるわけです。しかし実際のところは、その質問というのは、「誰が神を創造したのか。」という質問は、別の質問に置き換えるとナンセンスな質問だということにお気付きになると思います。それと同じ意味を持つ質問というのは「独身者は誰と結婚しているんですか。」という質問です。「独身者は誰と結婚しているんですか。」なんていう質問を聞いても、皆さんは「馬鹿らしい。くだらない。答えるに値しない。」と。実はそれと同等のことが「誰が神をつくったのですか。」という質問にも当てはまるということを知って下さい。宇宙には始まりがあるということは誰もが認めていることです、承知していることです。始まりがあるということは、原因があるということです。それを、すべてのものを造った創造主に求めようとするわけです。「神がすべてを造られた。では、神は誰がつくったのか。」という、もうその質問というのはもう馬鹿げているわけです。すべてには始まりがあるということは、すべての始まりには原因がある。その原因なるお方が勿論創造者である神であります。宇宙には始まりがあることはもう否定しませんので、それは伝えて頂いて、宇宙に始まりがある以上は、その宇宙の始まりの原因があるということ。そしてその原因は、聖書によれば創造主であるということです。創造主は宇宙とは違って、始まりが無いお方です。ですから原因を必要としないお方だということを伝えて頂きたいと思います。これは難しい表現で言いますと、アインシュタインの一般相対性理論という実験でも検証されていることです。時間が物質と空間に結びついていることが明らかになっていますから、時間というものも宇宙の始まりの時、物質、そして空間と共に始まったはずですが、バラバラではなくて、一緒にです。ですから創造主は、その時間と物質と空間、そのすべてを同時にお造りになったわけです。時間を造った方でもあるわけです。ですからその方の前に、創造主をつくる創造主がいるというのは、もう全くナンセンスな話で、もうそれ以上話をする必要もないくらい馬鹿らしい話です。もうキリがないというか、もう話にならない。もうただ単にひねくれているだけであって、全く論理的でない、もう頭から信じるつもりがない人が、それこそふざけるような誤魔化すような質問内容なので、もう相手にする必要がないくらいの質問ということを知って下さい。難しいところを突かれたとか、考えも及ばないような質問をされたということでショックを受けたり、びっくりしないで下さい。それほどくだらない質問はないということを認識して頂いて、創造主には始まりがない。それが論理的であります。そうでなければ、創造主という存在そのものを否定する以外にはもう説明のしようがないからです。

そして、これは熱力学の第一法則と呼ばれるもの。宇宙の質量、エネルギーの総量は一定であるというその法則

です。そしてもう一つは、熱力学の第二法則というもの。宇宙の利用出来るエネルギーはどんどん減り続けている。一定量あるんですけども、それがどんどん減っている。それはエントロピーの法則。エントロピーという最大に向かっていくという。地球もどんどん年老いているわけです。太陽もどんどん年老いていくわけです。いつかすべては減んでいくというのが、これが法則によって認められているところです。総量に限りがあるという熱力学の第一法則が認められて、その限りあるエネルギーがどんどん今減少に向かっていく、エントロピーに向かっていく、ということが認められている。これが科学的な事実であります。ですから宇宙は永遠の昔から永遠にわたって存在しているわけではないということ。これはもう科学的に立証されていることです。そういう宇宙の始まりがあっても、その原因は必ずしも必要では無い。つまり、創造主は必要では無い、という考え自体は、もうナンセンスでしかないということです。始まりに原因があるということはどうしても認めたくないわけです。始まりはあるだろう、それは信じています。でも原因はないんですと、一生懸命そう言って主張しているわけです。もうそんな議論には関わる必要はないということです。もう自明の理でありますから、そのような懐疑主義者の愚かしさに付き合う必要はありません。聖書が言う通り、愚か者は心の中で神はいないと言っているわけです。神様は誰がつくったんですか。一生懸命愚かしさの中で叫んでいるだけで、もうまともに考えればナンセンスだということは、非論理的な質問だということは、分かるはずであります。

この創造主は、ですから創造されたことのない創造主として私たちは信じています。でも、この創造主を認めない、信じない人たちは、すべてを否定してすべてを歪めようとするわけです。そして、こともあろうに「神様なんていう存在は人間が創造した産物に過ぎない。宗教は人間が作ったんでしょう。だから神も人間が作ったに違いない。」そして人間は、自分の好みや考えや都合に合うような神々をこれまで沢山こしらえてきたわけです。空想上の神々というものを作ってきたわけです。そしてそれを今皆さんにもどんなものかを、今 5 つにまとめたものをご紹介しますので、聞きながら考えて頂きたいと思います。多くの人が自分好みの神をそれぞれの心に持っているということです。これは**創世記 1 章 1 節**を信じない人たちの神観と言って良いと思います。無神論者と言っても、無神論という信仰を持っています。神なんか信じないという信仰が神なんです。勿論神を信じるとしても、創造主以外の神々を信じるという多神論もありますから、いろんな神々が存在することはお伝えした通りです。

まず初めに、人間の恐れや不安から生じた神、というのが存在します。自然現象への恐れ。「祟りがあるんじゃないか。バチが当たるんじゃないか。」病気だとか災害、死などへの恐れから生じた神のことを言います。常に罰する神様。バチを与える神様。不幸や呪いや災いをもたらす存在です。人間存在の矛盾や苦悩を解消するためにその存在が要請された神のことを言います。

2 番目の神は、人間の都合にあわせて創作された神。これは人間の必要に奉仕する召使のような存在です。さっきの 1 番目の神と同じように偶像の表現をとることが多いです。学問の神様、それに拝めば志望校に入学出来ますとか。縁結びの神様、その縁結びの神様に拝めば理想的な人と、好きな人と結婚出来ますとか。人間の都合に合わせた神です。人間の必要に奉仕する召使の神です。

3 番目は、宇宙の合理性を説明するための神。この宇宙の合理性を説明するための神は、究極的に神が存在しないと説明がつかないので、その存在が要請された非人格的な神です。これはもっと簡単に一言で言うと、法則としての神です。

4 番目は、神は存在しないと信じる人たちが、頭の中で思い描いている神です。似ている表現かもしれませんが、最初からその存在がもう不合理に描かれている神様です。神に無関心か、神に反感を持っている人が、様々な情報をごちゃ混ぜにして自己流に描き出している神と言って良いと思います。私たちは誰かに反感を持ちますと、ほんのわずかな情報でその人を悪いと判断します。人間関係でよくこのことは起きます。ちょっと嫌な顔をされた。ちょっと嫌な一言を言われた。そして、その人に関するいろんな情報をちょっと耳に挟むわけです。そうすると思いを膨らませて、如何にその人がどれほど悪いのかということをお空想して膨らませて、とんでもない悪人に仕立て上げるわけです。そういう癖というか、傾向が私たちにもあります。それを神にもするわけです。「教会に行ったらあんなことを

言われたとか。クリスチャンからあんな扱いを受けたとか。だからキリスト教の神はこんな神だ。」というふうなもうイメージです。一方的なイメージを作り上げるわけです。ですからよく「神なんか信じない。」という人の神観を聞いてみて下さい。「あなたが信じないという神様どういう神様なんですか。」と詳しく聞いてみて下さい。そうすると、聖書の神とは全然違う神だということに気づくと思います。そして、むしろあなたも同意します。「あなたが信じない神は、私も信じません。」そう言って結論づけられると思います。「聖書の神はあなたが信じない神とは全然違うお方ですよ。」と今度は新たに紹介出来ます。

5番目に、人間の虚無、人間の有限性を救うために存在してもらわないと困る神様。無意味で空虚の中に投げ出されている人間存在を救ってもらうために必要な神のことであります。存在の根拠としての神様です。神なしでは生きていけないということは認めているのですが、聖書に啓示されているような創造主である神をそのまま受け入れることは出来ないわけです。自分の理性に合わせて、一部或いは大幅に修正した神、自分にとって分かりやすい神ならば信じるわけです。その他にも人間側の必要性から生まれた様々な神があると思います。自分にとって分かりやすい神。分かりにくい神は信じないという立場です。

でも、全部今挙げた5つに共通しているのは、人間の想像の産物としての神々です。私たちが信じている神は人間の想像の産物としての神ではありません。**創世記1章1節**に、もう最初から神の存在が絶対的であるとして紹介されている神。神の啓示の言葉に冒頭に登場する神です。勿論**創世記1章1節**より前から、天地創造の前から、時空を超えて存在しておられたすべての起源である方、原因である方。人間が想像したお方ではないです。すべてのものを造られた方というのは、人間の想像上の存在ではないということです。ですから、すべてのものを造られた創造主を誰かがつくるといふことはあり得ないことだし、神は創造されたお方ではないから創造主と呼ばれるわけです。だからその方は必然的に2人は居ないわけです。1人しか居ないわけです。造った方は沢山居るわけじゃないです。たった1人の方が、唯一の方が造るわけです。その唯一の神を誰がつくったのかというのは、本当に無意味なナンセンスな話と。質問自体が矛盾しているわけです。唯一の神を創造した別の神が居るとすれば、もはや唯一なんていう言葉がもう存在しないわけです。「唯一の神とは唯一だ。」と言えなくなってしまふ。そういうもう訳の分からない議論になってしまいますので。仮にそんな二番手の創造主を認めるとしますと、唯一の神を創造した創造主を創造したのは誰かということ、常に考えなくては行けない。もうこの質問は無限に続きます。「じゃあ、その神をつくったのは誰ですか。じゃあ、その神をつくったのは誰ですか。」というそういうくだらないエンドレスの不毛な議論となりますから、やめなければいけません。神とは、創造主とは、永遠なる存在です。私たちの今見ている世界を超えたお方です、超越したお方です。時間も空間も物質もすべてを同時に造られたお方です。だから永遠なる存在です。唯一であり、永遠なる存在。それが**エロヒーム**と呼ばれるお方、三位一体の神です。過去とか現在とか未来というのは、この方には当てはまりません。神が変わるということがないということです。神様は、過去はこうだった。旧約の神はこうだった。でも新約の神はまた違ってとか。それはあり得ないことです。旧約の神も新約の神も全く同じ神です。神様が変わるということはないわけです。これは有難いことです。あなたが変わっても神は変わりません。神の愛は変わらない永遠の愛です。あなたがそむいても神の愛は引き続きあなたに注がれるということです。私たちが神に逆らったら神の愛はそこでストップしてしまうかと言ったら、そうではないということです。私たちが神を信じて信じなくても、神はあなたを愛しています。罪人をも神は愛しています。その証拠に、イエス・キリストがこの世に送られたわけです。ですから神の愛は変わらない永遠の愛であります。その愛は初めもなく、終わりもない愛です。永遠の愛ですから当然です。造られることも生まれることも死ぬこともない。ずっと続いている愛です。永遠において神があなたを愛さなかった瞬間は、一瞬たりともないということです。生まれる前からあなたは愛されていました。生まれた後もあなたは神に背を向け、さんざん悲しまれることを告げたかもしれませんが。「神なんかいない。」とあなたは人の前でも宣言したかもしれませんが、神を頭で信じていると言いながら、まったく神を信じていないような矛盾するような生き方を生きてしまったのかもしれませんが。公の場で神を否定するようなことすらして、妥協もしたり、いろいろな反逆、あからさまな罪も犯してきたかもしれませんが、でもどの瞬間であろうと神の愛は変わらずあなたに注がれ

てきたということを知って下さい。教会に行っている時には神の愛がいっぱい注がれて、教会に行っていない時には少なく注がれるということもないわけです。聖書を読まなかった日も神は変わらず等しくあなたを愛しておられる。祈らなかつた日も神はあなたを等しく愛されている。それが私たちの信じている神です。ですから神を信じないと言う人たちは、本当に残念な人たちです。その人はやはり愚か者としか言えないわけです。先ほどから何度も引用している**詩篇 14:1**に、愚か者は心の中で神はいないと言っているわけです。そういう人たちは必然的に**士師記 21:25**の状態に陥っていきます。愚かな生き方に進んで行くということです。士師記の最後の言葉です。『**そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた。**』イスラエルの王は、究極的には神です。彼らには神がなかったわけです。自分を神として、自分が支配者となって、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた。**創世記 1章 1節**を信じない人たち、創造主を認めない人たちは、必ず**士師記 21章 25節**に至って行きます。自分の目に正しいと見えることを行なっていく、そういうライフスタイルに彼らは進んで行きます。つまり自分が神、自分が基準です。

さらに、その生き方がどんな生き方か、具体的に記しているのが**ローマ人への手紙 1:18**以降です。『¹⁸というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。¹⁹ それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。²⁰ 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。²¹ それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。²² 彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、²³ 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。²⁴ それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。²⁵ それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。』士師記の時代の人々がまさにこの通りの人たちだったということを私たちは読んで知ることが出来ます。そして、**26節**に『²⁶ こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、女は自然の用を不自然なものに換え、²⁷ 同じように、男も、女の自然な用を捨てて男どうしで情欲に燃え、男が男と恥ずべきことを行なうようになり、こうしてその誤りに対する当然の報いを自分の身に受けているのです。』無神論の結果、進化論の結果、唯物論の結果、ヒューマンイズムの結果、多神論の結果、すべてめいめいが自分の目に正しいと見えることを行うようになり、ここに出てくるようなライフスタイルに至って行きます。同性愛というのはここに 1 つ描かれています。同性愛だけが際だったおぞましい罪で決して赦されない罪だと私は強調したいのではありません。でも今日、これが社会に受け入れられて、そしてそれを非難する者が却って人種差別をするかのように、彼らの権利を侵害するかのように訴えられたり、或いは排除されていく。そういう社会にこれからどんどん進んで行くわけです。それはまさに聖書が警告している社会そのものです。そして**28節**に『²⁸ また、彼らが神を知ろうとしないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。²⁹ 彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、³⁰ そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、³¹ わきまのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。³² 彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。』**32節**までお読みしました。同性愛というのが際だったおぞましい罪というわけではないということは、今読んだところで分かると思います。あらゆる不義と、あらゆる悪と、あらゆるむさぼりと、あらゆる悪意。その後のリストを見て下さい。³³ 妬み。同性愛と同じ罪です。争い、欺き、悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者。本人がいなくてその人の悪口を言う。同性愛と全く同じ罪です。死罪に当たる罪だと聖書は断罪しています。なのに私たちは、自分が持っていない罪を持っている人を見たらおぞましく思うわけです。同じ罪を犯していない人は、特別な悪い罪を犯してい

るかのように思うわけです。「私は同性愛なんか絶対に、気持ち悪いし、そんな汚らわしい。」と言うかもしれませんが。でも実際には、神の目からは同じように汚らわしいのです。同じように死罪に値する大きな罪です。全部その原因はどこから来ているかといえば、神を知りながら神を神として崇めないことから来ています。クリスチャンは「神を知っている。」と言えるはずですが、でも神を知っていながら、まるで無神論者であるかのように、まるで進化論者であるかのように「すべては偶然。すべてには意味がない。そしてめいめい自分の目に正しいと見えることをやっていけばそれで良いんじゃないですか。聖書なんか読まなくたって良いじゃないですか。聖書が絶対的な権威なんて。それぞれの意見があって良いじゃないですか。法律はこう言っています。社会はこれを支持しています。政治的にはそれは今良くないこととして、時代時代によって考え方は変わるんですよ。私の経験上これはこういうことなんです。」とか、皆めいめい自分の目に正しいと見えることを考え、行うようになって行きます。神を知っていながら、クリスチャンでありながら、聖書読んでいながら、平気でそういうことを口にしたたりもするわけです。

これで時間が来ましたので今日は**創世記 1 章 1 節**の“**初めに、神は**”で終わりたいと思いますけれども、私たちは今日の一日を始める時も、“**初めに、神は**”からスタートしなければいけません。私たちが常に過ちを犯すのは「初めに、私は」自分がいつもトップです。自分が常に優先です。神様が今日一日計画されていることを、私たちはまず知ろうとすることから。自分がまずしたいことから、自分がまずやらなければいけないことから 1 日を始めようとして。その時点でもうあなたは、士師記の時代の人たち、自分の目に正しいと見えることを行う人たち。そして、その中には**ローマ 1 章**に出てくるリストに挙げられているような、おぞましい汚らわしいライフスタイルをしている人たちがいるわけで、あなたもその一員になって行くわけです。仲間になって行くわけです。そのようなことを行なえば、死罪に当たることを知っていながら、神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう人に心から同意するようになるわけです。気を付けなければいけません。もう**創世記 1 章 1 節**を信じる人は、毎日“**初めに、神は**”からスタートしなければいけません。もうすべての始めですから、仕事の始めもそうです。自分が動き出す始め。息をするその時から、もう初めからスタートして下さい。初めに神ではなくて、自分なり他のものが来ていたならば、是非そこからやり直して頂きたいと思います。

そして、“**初めに、神は**”からスタートしたら、その後は物凄いことが起きます。あなたの天、あなたの地が、今は何も無いように見えてもです。この方は無から創造出来る、“**バーラー**”の働きを成すことが出来る方ですから、期待して頂きたいと思います。それが次回の内容となってきます。神がすべてを始めて下さいます。あなたの人生、すべてを作り変えて下さいます。“初めに、自分は”から始めたら、もうろくなものは出来ません。ひどい人生です。後で後悔するしかない、もうメチャメチャな人生です。でも神は、あなたの人生を作り変えることも出来ます。どこかの段階で“**初めに、神は**”にあなたが切り替えるならば、立ち返るならば、悔い改めるならば、そこからでも人生はやり直せるのです。手遅れということはありません。「もう私は 60 年も 70 年も生きてきましたから、もう先は見えています。もう人生は終わりです。」なんて思わないで下さい。諦めないで下さい。“**初めに、神は**”今日からでも、この瞬間からでも始めればすべて変えられます。新しく作り変えられます。そのことを期待して、また次回の学びに準備をしていきたいと思えます。